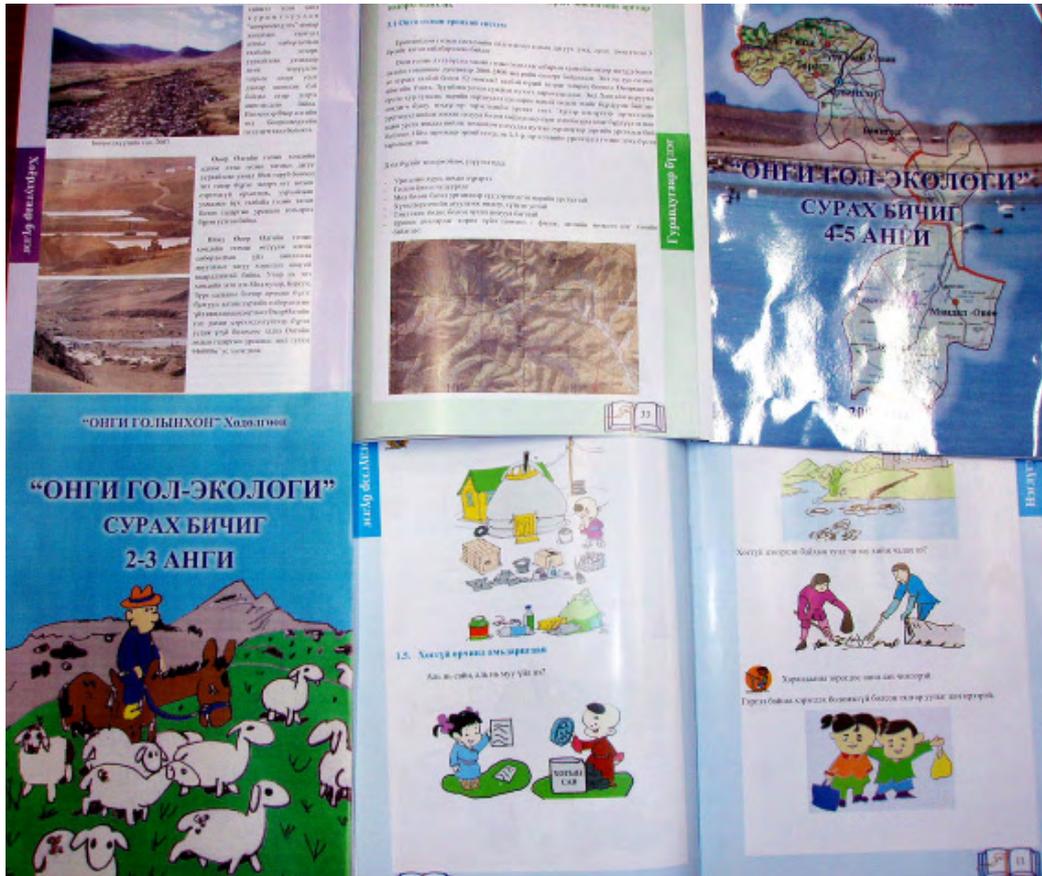


河北瀉 かほくがた



N P O法人河北瀉湖沼研究所通信

2007. Vol.13 №.1



ムンフナサンさんが製作した環境教育の教科書。
低学年、中学年、高学年のそれぞれ3分冊に分かれている。

モンゴル市民との交流

河北瀉湖沼研究所は2004年からモンゴル国の環境保全活動をおこなう市民団体等と交流を続けています。交流の最初のきっかけは、「オンギ川市民運動」の方々との出会いでした。モンゴル中央部を流れるオンギ川は、400km以上の長さを持つ大きな川でしたが、上流部での金の採掘のため水量が減り、現在では下流のウラン湖が消滅するという事態となっています。「オンギ川市民運動」は、こうした問題の解決のために精力的に活動している団体です。同団体と活動交流をおこなうなかで、モンゴルにお

いて環境問題に取り組む多くの人たちとの交流が生まれています。今年6月には、オンギ川流域の都市アルバイヘルで教師をされているムンフナサンさんが来日しました。モンゴルでは環境教育が遅れているということで、ムンフナサンさんをはじめとする現場の教師により教科書がつけられました。今回の来日では、河北瀉湖沼研究所の主催する会合において、この教科書の紹介とともにオンギ川の現状について解説いただきました。また、今後、教科書づくりなどの活動で相互に協力できることなどを協議しました。(特集記事 3p, 6-8p)

カツちゅん ショウくん
かほくがた ナルドレン

連載 河北潟の仲間たち

第5回 スッポン



ることができません。それでも、まれに河北潟干拓地を徘徊していたり、道路で自動車に轢かれたりしたスッポンを見かけます。孵化したばかりの子ガメはうまく潜れないのか、水面をひょこひょこ泳いでいるのを見かけることがあります。

噛みつくとも雷が鳴っても離さないと良くいわれますが、実は臆病なゆえに防衛のために噛みつくようです。肉食性で魚類や甲殻類などを食べるとのこと。河北潟では、アメリカザリガニが幅を利かせすぎているので、捕食者としてのスッポンに期待したいところです。（文 高橋 久）

河北潟クリーン作成 & グリーン作戦

第13回河北潟クリーン作成(主催:河北潟自然再生協議会)が2007年6月10日に実施されました。今回は参加団体が約40団体に増え、全体で800名を超える参加がありました。今年は実施時期が遅くなったため、湖岸には草が茂り、ゴミ拾いが困難な場所もありましたが、昨年に近い量のゴミが回収されました。参加者の努力の成果とともに、不法投棄を含め、まだまだゴミが多い実態があるようです。不法投棄の例としては、昨年よりも減りましたが、家電品としてテレビが数台見つかりました。また、自動車のタイヤは相変わらず多く、その他、電線のビニール被覆がまとまって見つかり、工事現場の足場となる鉄パイプもまとめて棄ててありました。ゴミ拾いとともに入法投棄の対策も必要となっているようです。



アサザビオトープの整備

クリーン作戦とあわせて津幡町潟端のアサザビオトープ整備活動、湖岸の植生帯修復のためのグリーン作戦も実施されました。アサザビオトープでは、約30名が、水辺から水面への繁茂が著しい外来種のチクゴスズメノヒエを除去するとともに、陸上ではセイタカアワダチソウの抜き取り作業を実施しました。グリーン作戦では、金沢大学里山自然学校の協力を得て、金沢市角間から切り出された孟宗竹を使って、筏や消波堤をつくり、ヤナギやマコモの植栽をおこないました。



グリーン作戦の様子



特集 モンゴルプロジェクト1 (6~8ページ)

河北潟湖沼研究所通信「かほくがた」は、今年度より内容を一新し、ページ数を増やすとともに、連載や特集企画をおこなっていきます。今号は特集として「モンゴルプロジェクト1」を6~8ページに掲載します。「モンゴル紀行」は、当研究所の大串理事が2005年~2006年にかけてモンゴル国の草原と砂漠地帯を視察した際の記録をまとめたものです。この視察に関しては、すでに「河北潟総合研究」10巻で、自然環境の現状と問題点について、考察を含めて詳細にまとめられておりますが、ここでは、モンゴルの社会や自然環境についての旅行記録を数回に分けて掲載します。また、「モンゴル環境状況視察の旅」では、生活者及び旅行者の視点を加えた、モンゴルの自然、人々とその暮らしの様子などの見聞録を掲載します。モンゴル・エコ・フォーラムの紹介記事も掲載しました。このフォーラムには河北潟湖沼研究所も参加しています。

河北潟の水郷 - 潟端より -

第1回 水郷、潟端を流れる川とフゴ

河北潟の東縁に、潟端（かたばた）という集落があります。河北潟に干拓地ができ、周辺の排水改良事業がおこなわれる以前の1950年代頃まで、河北潟とその周りは豊かな水郷地帯でした。つい半世紀前のことですが、その頃の人の暮らしと風景は、現在とは全く異なったものです。潟端で暮らしてきた昭和4年生まれの人、坂野 巖さんに様々な話を伺っています。水郷時代の潟端の暮らしと自然の様子について聞き書きしていきたいと思います。

潟端について

潟端は、もともとは浅田、北中條、南中條、太田、潟端の5つの部落からなる旧中條村にありました。この5つの部落の中で潟端以外は、丘陵地の裾野の少し高い位置にあることから、半乾田や畑がおもにつくられていました。潟端は河北潟にもっとも近い低地で、部落の周り一帯が半湿田と湿田でした。泥地で裏作ができないことから、潟端の人たちは米づくりに専念していました。

米づくりに適した立地の潟端は、歴史的には新しくできた部落です。延宝元年(1673年)の河北潟縁開発によりできた新村で、潟端新村と呼ばれていました。加賀の5代藩主前田綱紀公が潟端に鷹狩りに来たときに、この河北潟に近い沼地を見て、ここを開墾して一村をつくろうと計画したのがはじまりといわれています。

田んぼと川

家々と潟と田んぼをつなぐように、川(水路)がいくつも流れていました。津幡川から水を引いている川尻用水路は、最も高い位置にあり、山側の高台から潟に向かっては、排水のための川が7本流れていました。太田川と中條川は、排水路として利用されるとともに、その水がポンプでくみ上げられ、春から夏の間の用水としても利用されていました。

二百十日(9月1日)を迎えてから、稲の刈り取りが始まり、川の両側に稲架場とりのいれぶねができました。ハザ干した稲は、各家にある取入舟に積み、部落の真ん中を流れる「前川」を通過して家の前まで運ばれました。稲を積み込んだ荷舟が午後から夕方まで行き来し、水郷ならではの豊かな風景がひろがっていました。

川(水路)や田んぼにはすべて名前があり、細かい名前が生活の中で役立ちました。誰かが怪我をしたときや、魚がどこで捕れたかなど、すぐに場所を伝達することができるのです。終戦後の土地改良事業で水田がいまの形に整備されたときに、多くは使われなくなり、水路の名称は番号のみが残されました。昭和5年の地図を参考にして、坂野さんの記憶に残る28本の川の名前を図に記しました。川の名前は村ごとに異なり、たとえば中條川(ちゅうじょうかわ)は、隣の井上村では「十二号の川」と呼ばれるなど、村の境界を流れる川には2つの名前がありました。



この「モンゴル紀行」は私の2005年と2006年のモンゴル旅行中の記録のうちで、モンゴルの自然や社会に関して興味があったところを抜粋したものです。この（1）はモンゴル国の首都ウランバートルへ到着した次の日から始まります。

2005年8月18日

午前6時半にはほぼ夜が明けきる。ウランバートルで初めての朝。昨夜、到着したのが深夜で、空港からホテルまで景色が全く見えなかった。今朝は良い天気、青空にうす雲がたなびいている。



午前7時の室内の温度は24度、6階にある部屋の窓の外の気温は20度。モンゴルはいま夏時間で日本との時差はない。

市街の中心から少し離れたホテルのあたり、広い道路をはさんで空き地が多く、長方形で5 - 8階建ての薄いクリーム色のアパート群と、その間に所々、白とオレンジ色の10数階建てのビルディングがあって、どこか新しく建設中の街のように見える。

市街地の北に丘陵が連なる。丘陵の下半分は草山上の半分は樹林に覆われている。街のビルの周りや空き地にはスズメに似た小鳥の群がおりている。日本のトビよりやや小さいタカが街の上空をゆっくりと旋回している。ここ数年、私が見てきた中国の上海、南京、昆明などの都市にくらべて鳥が多いのが目立つ。

日没は午後9時過ぎ。緯度が高いためか遅くまで明るい。

8月19日

ゴビ砂漠のなかのウーシ・マンハンの砂丘療養所に向けて出発する日。

ウーシ・マンハン療養所の設立者で元首相のナランツァツアルトさんの一行と、自然保護活動をしている住民団体のオンギ川運動のガンティグマさんの一行と私たち日本からの訪問団合わせて18人、車4台でホテルを出る。市街地は昨日と同様に自動車に混み合っているが、市街を抜けると車は急に少なくなる。ウランバートルから南東、中国国境に向かう道を南下する。道はややゆとりがある2車線のアスファルト舗装道路で、鉄道線路と併行して走っている。車は時速80 - 100kmで走る。道は直線かやや緩やかなカーブで、道の両側には1 - 2kmの草原を隔てて低い丘陵が連なる。丘陵はウランバートル周辺と同じように下部は草山上部には低くよく揃った高さの樹林となっている。南下するにつれて樹林は少なくなり1時間ほど走ると丘陵は上部まで草山となる。国道は草原の中を流れる川幅100m位の川を横切る。草原の平面に川筋だけ削られて低くなった自然河川である。水は澄んでおり、川岸の所々に小さな木立がある。両側の丘陵は次第に低くなり、草原が広がる。



草丈10cm前後の草原の中に牧民のグル(モンゴル式の丸いテント。中国のモンゴル自治区ではパオという名で知られている)が散在する。一行は国道をそれてひとつのグルに立ち寄り馬乳酒を買う。馬乳酒は各家庭で醸造され発酵が

進行中なので放っておくと酸っぱくなるから、買った馬乳酒には発酵を止めるためにマッチの軸を入れる。

グルの周りには50頭ほどの馬群と80頭ほどの羊群がいる。馬は栗毛が多く白馬が少し混じっている。この馬群や羊群のいるあたりの草は食われて、地面が露出している。

午前10時頃になると日射しが強くなり、車内は温度が上がって33度を越える。空は青空にうろこ雲が広がっている。全体が黒く羽の一部が白いタカが舞っている。

ウランバートルから離れるにつれて、国道にはアスファルトが剥げて窪んだ部分が多くなり、車はかなり揺れる。南下するにつれて両側の丘陵が低く、道から遠くなり、樹はほとんど無くなる。草原中の所々に直径が数十mの小さな湖が見える。雨水が溜まったもので間もなく干上がるのだらう。

ウランバートルから3時間ほど経って車は国道から離れて草原中に入る。自動車の通る部分だけ草がない道となっている。4台の車間距離

は次第に広がり500mを越える。草のない地面を走る車は激しく土煙を巻き上げて前の車の姿が見えなくなる。

草原の草は次第に低く、疎らになる。草の種類も変わっているように見えるがよく分からない。景観は次第に草原から砂漠になってゆく。砂漠といっても小石の多い固い地面である。車間距離はますます広がり、先行する車は遠くの砂塵でどのあたりを走っているか位置がわかる。

午後2時頃、地平線まで砂礫原と低い丘陵のほかに何も無い砂漠の中に煉瓦建てや白い土壁の家が数十、集まった小さな集落に着く。ここがゴビ・オクトル・ソムという郡庁の所在地。町というよりも遊牧民のひとつの集落地らしい。郡役所と公設宿泊所があり、ここで昼食。集落の広場に馬の像がある。広場に面した建物がこの町の唯一の売店で、広くない一室に野菜(タマネギ、ジャガイモなど)や菓子などの食料、靴や衣料、玩具などの日用品が並んでいる。この郡の人口は約二千人という。

モンゴル・エコ・フォーラムについて

モンゴルは内陸アジアの東部、シベリアの森林地帯と中国の黄河上・中流域の間にある広大な高原地帯です。その南半分は中国のモンゴル自治区、北半分は独立したモンゴル国となっています。

モンゴル・エコ・フォーラムは、モンゴル国と日本の研究者が交流して研究・情報を交換し、モンゴル国とその周辺地域の環境の現状分析、今後の環境保全に協力するために、2006年4月に設立されました。現在、NPO法人として東京に事務所を置き、主にシンポジウムの開催やモンゴルの自然環境関係の情報連絡の活動をしています。これまでに東京で4回のフォーラム(テーマ:モンゴルの環境は今)を開き、今年10月にはウランバートルで、来年2月には東京で「モンゴルの自然環境の現状報告ならびにデータを活用した環境保全対策」についてのシンポジウムを行う予定になっております。モンゴル・エコ・フォーラムの会長は植物生態学者の吉良竜夫氏(滋賀県顧問、びわ湖・フスグル湖交流協会会長)で、モンゴル地域の環境に関心がある多くの研究者が参加しております。

モンゴル国の自然環境は、温暖多雨の日本とは大きく違っています。日本の4倍という広い国土は平均海拔1500mの高原にあり、厳しい寒さと乾燥にさらされています。モンゴル国の中部やや東北よりにある首都ウランバートルの年平均気温マイナス13度、年降水量281.8mm(金沢ではそれぞれ14.3度、2470.2mm)という気候のもとでは、人間と動植物の生活はわれわれの想像以上に非常にきびしいものです。このきびしい寒さと乾燥にさらされている地域の環境保全は、日本の常識が通用しないところがたくさんあります。環境保全について、日本の常識からする善意の援助が却って環境破壊につながることもあります。何よりもこの地域の生態的条件と、それがどのようにして安定しているのかを理解することが必要です。モンゴル・エコ・フォーラムの役割はこの環境の現状を明らかにして、環境保全とここに住んでいる人たちの生活の安定のための、総合的対策を立てる基礎を作ることでしょう。(大串龍一)

モンゴル環境状況視察の旅...報告 1

2006年8月26日～9月8日の旅
大館小夜子

8月26日小松空港をモンゴルに向け出発

小松を午前13時55分に出発、韓国で乗り換え、今年名前が変わったというチンギスハン空港に到着したのは23時だ。迎えのツメさんは背が高い40歳くらいのモンゴル美人だ。優愛想が良く日本語はあまり上手くはないが積極的に話す。道路はかなりでこぼこがひどく、車は左右に大きく揺れる。

ウランバートル市内の宿泊するフラワーホテルは日本人向けの質素で落ち着いたホテルだ。部屋は値段を安く上げるため、お風呂が無い部屋をたのんだ。外からは夜半とも思えぬ

大声と、花火の大きな破裂音が聞こえる。

数年前、娘の薫子とソルトレイク市で、夜半の花火音を聞いたことを思い出した。



何だか興奮して朝4時まで寝つけない。5階の私の部屋は藤木さん、大串先生と離れている。大串先生の部屋の前を通りエレベーターに乗るのだが、私だけが一番奥の部屋なので面倒くさい。

翌朝は昼近くまでNHKの連ドラやニュースを見る。朝食を今朝は抜いた。1階のレストランで11時まで採ることが出来る。バイキング形式でお粥やパン、美味しいハムやソーセージ、サラダなど結構充実しているらしい。

昼ころ、モンゴル環境大臣のチャドラーさんが自分の土地へ案内する時間の打ち合わせに来たのだ。通訳は日本留学経験者のチェチェングさんという34歳、彼女は学生結婚をしたが今は男の子を



何時もバイキング料理が揃う

自分一人で育てている静かな女性だ。

ドルジさんも同席した。彼は元総理大臣のナランツァルトさんの通訳だ。以前金沢で一度会った事がある。次の日、チャドラーさんの郊外の土地を見に行く。青い屋根のログハウス、ゲル、馬小屋や風車、雄大な丘陵が凄い。馬や牛が草を食べている。空は高くて濃い青色だ。日差しが強いが空気は冷たいのでジャンパーが離せない。川では牛や馬が水を飲んだり、草を食んだりして何ともいえない長閑な場所だ。向かいの丘の上には、レストランがあり、行楽に来た若者達のグループがバスケットをしている。丘の下にはチャドラーさんの土地や、トール川を挟んでウランバートル市内が見える。町の左右に山並みが続いている。ロケーションは最高だ！（続く）



風車とチャドラーさん



ゲルには管理人、大工が住んでいる

編集後記

本号は、本来6月中に発行の予定でしたが、大幅に遅れましたことをお詫び致します。本紙のリニューアルに伴い、事務的作業の遅れが原因です。今号から8ページ建ての一部カラー印刷となりました。今後研究誌「河北潟総合研究」との棲み分けを図りつつ、親しみやすくかつ内容の濃い紙面にしていきたいと思っております。次号以降は発行の間隔を詰めて年4回発行を続けたいと思っております。よろしくお願いたします。（編集部 高橋）

